HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帝政ロシアにおけるノヴォロシア・ベッサラビアの成立 : 併合から総督府の設置まで
Author(s)	志田, 恭子
Description	研究ノート
Citation	スラヴ研究, 49, 245-268
Issue Date	2002
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38984
Type	departmental bulletin paper
File Information	49-009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［研究ノート］

帝政ロシアにおける ノヴォロシア・ベッサラビアの成立

―併合から総督府の設置まで―

志 田 恭 子

はじめに

ロシアはモスクワ大公国時代から帝政時代にかけて、ヴォルガ・ウラル地域、シベリア、極東、ウクライナ、フィンランド、ポーランド、バルト沿岸、カフカース、中央アジアなどを併合し、その行政機構に組み入れてきた。17－19世紀には、ウクライナ・コザーク領、クリム・ハン国領、オスマン帝国領、モルドヴァ公国領を併合し、オデーサにノヴォロシア・ベッサラビア総督府を設置する(1)。しかし、黒海やバルカンへの進出を目的とする南進政策として片付けられやすいロシア南部地域の併合は、実は「非帝国主義的」な性格を多分に持ち合わせたプロセスであった。ロシアは1774年のキュチュク・カイナルジャ条約でクリム・ハン国をその宗主国であるオスマン帝国から引き離したが、すぐには完全併合しなかった。これはエカチェリーナ２世がクリム・ハン国の独立と近代化改革を支援したためであった。また1812年にモルドヴァ公国から併合したベッサラビアには自治政府を置き、すぐに帝国の県政に編入しなかった。これはロシア軍がモルドヴァとワラキアのドナウ二公国を制圧したとき、ルーマニア人を掌握するどころか地元貴族に翻弄されて統治もままならなかった苦い経験によるものであり、またアレクサンドル１世がルーマニア人の伝統や慣習を保護したためであった。ノヴォロシアとベッサラビアの成立は、帝政ロシアの膨張主義的なイメージの再考をうながす事例の一つとなりうるだろう。

さらに、併合される側は必ずしも明確な民族の自立意識を持って一致団結して抵抗したわけではなかった。貴族や聖職者などの有力者層には迎合・妥協・保身の傾向が見られ、農民は団結して武器を取るよりも移住や国外脱出という現実的な選択をした例が多くみられた。近年、ロシア帝国と少数民族の関係を「抑圧 - 抵抗」の対立軸とする従来型の図式を解体すべきとの指摘が行なわれているが、その必要性がここでも裏付けられることとなるだろう(2)。

以下ではロシアが南部地域を併合し、ノヴォロシア・ベッサラビアという行政区画を成立させるまでの過程を考察し、帝国ロシアの併合・統治における「非抑圧的」性格と併合・統治される側の「非反抗的」態度とに着目したい。なお、ここでは現在のウクライナの地名はウクライナ語の表記に従うこととする。

1　ノヴォロシア総督府は1822年に設置。1828年からノヴォロシア・ベッサラビア総督府となり、1874年に廃止。

2　松里公孝「19世紀から20世紀初頭にかけての右岸ウクライナにおけるポーランド・ファクター」『スラヴ研究』第45号、1998年、101-138頁；松里公孝「パネル『ロシア帝国西部諸県の民族・信教関係』について」『ロシア史研究』第68号、2001年、4-6頁。塩川伸明「帝国の民族政策の基本は同化か？　一九九八年度大会『ロシア・ソ連の帝国的秩序』セッションの反省に寄せて」『ロシア史研究』第64号、1999年、24-33頁。

1．左岸ウクライナ・ザポリッジャの併合

ここではウクライナ・コザークの国家であるヘティマンシチーナ（Гетьманщина）と、コザーク揺籃の地であるザポリッジャ（Запоріжжя）の一世紀に及ぶ併合過程を追い、ウクライナ併合の特色について考える。

1569年のルブリン合同で成立したジェチポスポリータ（ポーランド・リトアニア王国）は17世紀前半にはドニプロー（ドニエプル）川左岸までその版図を広げており、ウクライナ・コザークはその傘下で戦争に参加していた[3]。しかし、その国境線をドニプロー右岸まで押し戻してヘティマンシチーナを築いたのが1648年にヘティマン（コザークの首領）となったボフダン・フメリニツィキー（1595－1657）であった。ヘティマンシチーナは西のジェチポスポリータ、東のモスクワ大公国、南のクリム・ハン国・オスマン帝国と国境を接し、この四者は互いに状況に応じて同盟と決裂を繰り返すといった複雑な外交関係を展開することとなる。

1654年のペレヤスラフにおける協定によって、ヘティマンシチーナとザポリッジャはモスクワの保護下に入り、ツァーリへの忠誠を誓うこととなる。ポーランドに対抗するためにロシアの援助を期待したコザークや都市住民は喜んで宣誓したが、キーイフの高位正教聖職者やザポリッジャ・コザークは宣誓を拒否した。抗議行動を起こしたコザーク連隊があり、またコザークに宣誓を強要された都市住民たちもいた。この協定に対するウクライナ側の反応は、すでに多様だったのである[4]。本来ペレヤスラフ協定はジェチポスポリータに対抗するための同盟としての意味を持っていたが、1656年にモスクワはヘティマンシチーナ抜きにポーランドと同盟し（ヴィリノ条約）、事実上協定は無効となった[5]。ヘティマンシチーナもまたこの関係を確定的なものとはみなしておらず、ロシアとポーランドの間で揺れ動いた。1658年に新ヘティマンのイワン・ヴィホフシキーが独断でジェチポスポリータとハヂャチ条約を締結し、ブラツラフ、キーイフ、チェルニヒフの３ヴォエヴォツトヴォから成る「大ルーシ公国」を建て、ジェチポスポリータと合併した[6]。しかしスタルシーナ（コザーク上層部）の反発が強かったために彼はポーランドへの亡命を余儀なくされる。翌1659年新ヘ

3　ジェチポスポリータはウクライナ・コザークを統制するために「登録コザーク（реєстрове козацтво）」制を導入した。1572年ポーランド王ジグムント２世が300人のコザークを軍人として正式に登録し、国家奉仕させたのが最初で、1590年には登録者数が1,000人に拡大し、1625年には６連隊6,000人となった。優遇措置を受けた登録コザークは次第に裕福な階層を形成し、非登録コザークとの対立を生むこととなる。小山哲、中井和夫「貴族の共和国とコサックの共和国」伊東孝之、井内敏夫、中井和夫編『新版世界各国史20　ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年、162-163頁。*Смолій В. (відп.ред.)* Малий словник історії України. Київ, 1997. С.335.

4　*Дорошенко Д.* Історія України. 4-те видання. Авгсбург, 1947. С.131; *Смолій В.А., Степанков В.С.* Українська національна революція XII ст.(1648-1676), Україна крізь віки Т.7. Київ, 1999. С.182.　ペレヤスラフでロシア側との交渉中からすでに、ペレラスラフの全教会から聖職者たちが長司祭フレホリーの元に集まって式典を開いてツァーリとその家族の長寿を祈願し、また多くの人々が喜び合ってツァーリの庇護下に入れるように祈ったとされる。*Грушевський М.* Історія України-Руси. Т.9-1. Київ, 1996. С.734.

5　*Дорошенко Д. І.* Нарис історії України. Львів, 1991. С.275.

6　「大ルーシ公国（велике князівство руське）」もしくは「ルーシ公国（князівство руське）」は独自の貨幣や軍を有し、ヘティマンの許可なしにポーランド軍が領内に入ることはできなかった。カトリックと正教が対等とされ、また大学やギムナジヤ、印刷所が建てられたとされる。*Грушевський М.* Історія України-Руси. Т.10. Київ, 1998. С.353-370; *Полонська-Василенко Н.* Історія України. 3-те видання. Т.2. Київ, 1995. С.38; *Антонович В.* Коротка Історія Козаччини. Третє виддання. Вінніпег, Давфін, 1971. С.144-145.

ティマンのユーリー・フメリニツィキー[7]は大ルーシ公国を廃止し、モスクワとペレヤスラフ条約の再確認を行なった。しかしモスクワはスタルシーナとの関係を強め、ユーリーの地位は名目上のものとなる。またモスクワはウクライナの民衆から苛酷に徴税し、不満は高まった。翌年ポーランド軍の侵攻を受けると、ユーリーもまたモスクワに背を向けて再び3ヴォエヴォツトヴォをポーランドに併合し、自治を承認される（スロボディシチェンシク条約）[8]。スタルシーナの猛反発を受けたユーリーは1663年に右岸に去り、この年から右岸と左岸でそれぞれ別のヘティマンを選出することとなる。このように、1667年にヘティマンシチーナがロシアとポーランドに分割される前から、ウクライナ・コザークは左岸のロシア志向と右岸のポーランド志向とに自ら分かれ始めていたのであった。

1667年にモスクワとポーランド間で締結されたアンドルシフ条約によって、キーイフを含むウクライナ左岸がモスクワに右岸がポーランドに併合された[9]。しかし実際には、この条約によってウクライナの右岸と左岸が完全に分断されたわけではなかった。1663年に最初の左岸ヘティマンとなったイワン・ブリュホヴェツィキー（在位1663－68年）は親ロシア派であったがのちにロシアに反旗を翻し、左岸コザークの手にかかって虐殺される[10]。1665年に右岸ヘティマンとなったペトロ・ドロシェンコ（在位1665－76年）はアンドルシフ条約に反対して右岸と左岸の統合を目指し、左岸に進攻した[11]。また彼は右岸ヘティマンでありながらオスマン帝国やクリム・ハン国と同盟してポーランド軍と戦った[12]。

ブリュホヴェツィキーに続いてヘティマンとなったデミヤン・ムノホフリシヌィ（在位1669－72年）も前任者と同様に左岸ヘティマンでありながらモスクワに対抗し、またヘティマンの権勢を強化したが、スタルシーナの手によってモスクワに引き渡され、妻子らとともにシベリアに流された[13]。続いてイワン・サモイロヴィチが1672年に左岸ヘティマン

7 ボフダンの息子。1657年に16歳でヘティマンに選出されるが、未熟であったため自ら退き、ヴィホフシキーがかわってヘティマンとなる。*Гуржій О.* Українська козацька держава в другій половині XVII-XVIII ст.: кордони, населення, право. Київ. 1996. С.35.

8 *Полонська-Василенко*. Історія України.С.39-41; *Верстюк В.Ф., Дзюба О.М., Репринцев В.Ф.* Україна від найдавніших часів до сьогодення : хронологічний довідник. Київ, 1995. С.71-72; *Гуржій*. Українська козацька держава. С.43-44.

9 1667年にロシア領となった左岸は行政単位としての連隊（полк）に分割される。10連隊が設置され、1連隊は7－20中隊（сотня）から成っていた。キーイフ、チェルヒニフなど左岸の12都市ではかつてジェチポスポリータ領だった頃からマグデブルグ法が施行されており、都市の自治はロシア支配下においても継続されたが、1830年のポーランドの「11月蜂起」の直後に廃止される。*Агаджанов С.Г. (отв.ред.)* Национальные окраины Российской империи : становление и развитие системы управления. М., 1997. С.122,127.

10 ブリュホヴェツィキーはヘティマンとなった当初は親ロシアではなかったが、1666年にモスクワを訪れた最初のヘティマンとなる。ロシアとの関係を絶った後はオスマン帝国のスルタンと同盟する。左岸に侵攻した右岸ヘティマンのドロシェンコ軍を迎え撃つ遠征のさなかに、寝返った左岸コザークによって殺害される。*Голобуцкий В.А.* Запорожское казачество. Киев, 1957. С.311,316; *Підкови І., Шуста Р.* Довідник з історії України. Київ, 2001. С.89-90.

11 左岸に侵攻したドロシェンコは、オスマン帝国など隣国からの干渉に対応するため、ブリュホヴェツィキーに続く左岸ヘティマンにムノホフリシヌィを任命し、すぐに右岸に戻った。*Яворницький Д.І.* Історія Запорозьких Козаків. Т.2. Київ, 1990. С.304.

12 この戦争の結果、1672年のブチャチ条約でオスマン帝国は西ポディルを獲得し、ドロシェンコもまたオスマン帝国の同盟者としてブラツラフやウマニを含むキーイフ南部地域を獲得し、領土を広げた。 *Гуржій*. Українська козацька держава. С.48; *Голобуцкий.* Запорожское казачество. С.318.

13 *Смолій, Степанков.* Українська національна революція. С.311-313; *Полонська-Василенко*. Історія України. С.49-50.

となる。彼は左右両岸のウクライナの統合を目指し、1674年に両岸のヘティマンとなった。1686年からのロシアとオスマン帝国との戦争でピョートル１世の軍とともにクリミアまで遠征するが成功せず、ヘティマンの座を追われる(14)。次のヘティマンのイワン・マゼパは、やはりロシア軍のオスマン帝国との戦争に参加して功績を上げ、ピョートルの信頼は厚かったが、カール12世のスウェーデンとの戦いやポーランドとの同盟のためにウクライナを利用するなどのロシアからの苛酷な仕打ちに耐えかね、ついにスウェーデン側に寝返った(15)。このように、ロシア領とポーランド領に分かれたのちも、左右両岸の支配を目指したヘティマンがおり、右岸と左岸の両軍が対峙した例があった。また左岸ヘティマンでありながらモスクワに、右岸ヘティマンでありながらポーランドに刃向かった例は決して少なくなかった。また左岸では、親ロシアのスタルシーナやコザークが反ロシアのヘティマンを追放・殺害したりロシアに引き渡したりするなどの深刻な内部対立が存在したのである。

ヘティマンシチーナの事実上の政府である総本部（генеральна старшина）に置かれたスタルシーナ・ラーダ（幹部会議）は軍の隊長から選出され、彼らの意向を反映する立場におり、ヘティマン以上に安定した地位に君臨した(16)。左岸ウクライナの特権階級はスタルシーナとシュリャフタ（貴族階級）、そして正教聖職者であり、彼らは広大な領地と農民を所有していた。彼ら支配者層は「デルジャフツィ（державці）」と呼ばれ、コザーク以外の農民や町人などは「ポスポルィティ（посполиті, 平民）」と総称された。ポスポルィティには土地所有が禁じられ、特に領地農民はシュリャフタやスタルシーナなどの領主たちにむごい扱いを受けることが多く、苛酷な領主に苦しむウクライナ農民からの請願がロシア人役人の元に数多く寄せられたほどであった(17)。ヘティマンシチーナの農民にとってはロシア人の地方役人よりウクライナ人領主のほうが恐ろしい存在だったのである。

ロシア政府はウクライナを次第にその行政機構に組み入れていき、特にピョートル時代からヘティマンやスタルシーナとの対立が顕在化する。ピョートル１世は1711年からロシア内に参議会（コレギヤ）を設置し始めていたが、1722年マロロシア庁（プリカース）(18)を廃

14　1681年のバフチサライ条約（オスマン帝国・クリム・ハン国・モスクワ間）によってドニプロー右岸がオスマン帝国領、左岸がモスクワ領となったため、サモイロヴィチは再び左岸のみ統治することとなった。スタルシーナはクリミア遠征の失敗を理由にモスクワにヘティマンの廃位を訴え、サモイロヴィチは息子とともにシベリアに流された。 *Підкови, Шуста.* Довідник. С.55,713-714; *Яворницький Д.І.* Історія Запорозьких Козаків. Київ, 1991. Т.2. С.443, Т.3. С.25-26.

15　*Гуржій*. Українська козацька держава. С.60; *Костомаров Н.И.* Мазепа. Москва, 1992. С.182; Stephan M. Horak. “Russian Expansion and Policy in Ukraine 1648-1791 : An Outline and Analysis,” in Michael Rywkin, ed., *Russian Colonial Expansion to 1917* (London and New York: Mansell Publishing Limited, 1988), ch.VI, p.112. ザポリッジャ・コザークがマゼパに従ったため、ピョートルはチョルトムルィツィカ本営を破壊する。コザークは南部に撤退してオスマン帝国との国境付近にカミャンシカ本営を築く。*Мицик Ю., Станіславський В., Щербак В.* Чортомлицька Січ // *Смолій В.* (від. ред.) Козацькі Січі (нариси з історії українського козацтва XVI-XIX ст.). Київ-Запоріжжя, 1998. С.105-107.

16　*Агаджанов* (*отв. ред.*). Национальные окраины. С.121.

17　貴族のみならず、聖職者も広大な領地を所有し、ときにスタルシーナやヘティマンに大きな影響をもつことがあった。女子修道院長が領地の農民を迫害した例もある。*Гуржій О.І., Чухліб Т.В.* Гетьманська Україна, Україна крізь віки. Т.8. Київ, 1999. С.79-84.

18　1654年のペレヤスラフ条約でヘティマンシチーナを併合した際、ヘティマンシチーナの問題に対処する機関として使節庁（посольский приказ）がモスクワに設置された。1663年、使節庁に替えて設置されたマロロシア庁（малороссийский приказ）はより強力な権限を付与され、ヘティマンシチーナ（マロロシア）の行政・軍事・司法の全権を握ることとなった。

止し、フレヒフにマロロシア参議会（コレギヤ）を設置した。コレギヤは6人のロシア人文官・軍人から組織され、左岸と東部地域のスロヴィド・ウクライナ（のちのハルキフ総督管区）の行政と財政を統括した[19]。これはウクライナの自治を制限しロシア帝国の統治網を拡張するための出先機関であり、ウクライナ支配者層は反発した。左岸ヘティマンであったイワン・スコロパツキー（在位1709－22年）はコレギヤの設置に抗議したが聞き入れらず、失意のうちに死ぬ[20]。続いてヘティマンとなったパヴロ・ポルボトク（在位1722－24年）はスタルシーナとともにマロロシア・コレギヤに対立し、ツァーリにコレギヤ廃止を強く求めたが、ペトロパヴロフスク要塞に投獄され拷問により死亡する[21]。しかし1725年にピョートルが死んだのち、コレギヤは実権を失った。1727年にヘティマン選挙が許可され、ダニーロ・アポストルが選出された。また1728年にコレギヤが一時閉鎖される[22]。しかしヘティマンが勢力を強めることを警戒したペテルブルグは、アポストルが死んだ1734年から再びヘティマンの選出を禁じ、ロシア人とウクライナ人の3人ずつから成る「ヘティマン政府会議（правління гетьманского уряду）」を設置した。この状態はエリザヴェータ女帝治世の1750年まで続く[23]。

エリザヴェータは親ウクライナとして知られた女帝であった。ウクライナ側からヘティマンの選挙を許可するように請願を受けたエリザヴェータは、愛人の弟であったキリロ・ロズモフシキー伯を推し、1750年に彼がヘティマンとなる[24]。ロズモフシキーはヨーロッパで教育を受けた開明的な政治家であり、彼の統治下でウクライナは勢力を高めた。1734年からザポリッジャがヘティマンの統治下に移り[25]、またエカチェリーナ2世が召集した「立法委員会（Уложенная комиссия）」に代表を派遣してウクライナの自治を請願した。しかしこのような傾向はロシア側の警戒心を煽ることとなる[26]。

---

19 *Мельник Л.* Гетоманщина першої чверті XVIII століття. Київ, 1997. С.218; *Агаджанов* (*отв.ред.*). Национальные окраины. С.137-138.

20 *Мельник.* Гетоманщина. С.222-225; *Підкови, Шуста.* Довідник. С.767-768.

21 *Гуржій.* Українська козацька держава. С.67; *Підкови, Шуста.* Довідник. С.598.

22 ピョートル2世がヘティマン選挙を許可しマロロシア・コレギヤを閉鎖したのは、オスマン帝国と緊張が高まったためウクライナ・コザークとの関係を修復する必要があったためとされる。1728年ピョートル2世はヘティマンシチーナの自治権を大きく制限したが、アポストルはウクライナの行政・軍事・裁判・経済の改革に一定の成果を収めた。*Дорошенко.* Нарис Історії України. С.411-416; *Підкови, Шуста.* Довідник. С.31-32.

23 Horak, "Russian Expansion," p.114; *Смолій* (*відп. ред.*). Малий словник. С.323.

24 *Гуржій, Чухліб.* Гетьманська Україна. С.53-54.

25 1667年のアンドルシフ条約でザポリッジャはモスクワとポーランド共同の管轄となり、その状態は1682年にロシア領となるまで続いた。1709年にピョートル1世によってチョルトムルィツィカ本営を破壊されたのち、カミャンシカ本営を設置。1711年にオレキシフ本営（クリム・ハン国領）、1734年に最後のザポリッジャ本営であるノヴァ本営（ロシア領）が建設される。このときザポリッジャには5つのパランカという行政単位が導入され、66年にはさらに3パランカが追加される。*Лоза Ю.* Україна історичний атлас. 8клас. Київ, 1999. С.16-17; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.130.

26 ウクライナ人は自治を許されている立場として、ロシア帝国の法典制定の委員会に参加する義務はないと主張したが、ルミャンツェフは彼らの不満を無視して選挙を実施した。彼は独立志向の強い貴族階級の参加に危機感を抱いて選挙妨害を行なったが、選出された貴族・コザーク・都市民の代表はヘティマン国家の自治や土地所有や税制や商業利益に関する権利の拡大、大学など教育機関の設置などを求める要望書を提出した。代表団を率いたのはフリホリー・ポレトゥカ。Zenon E. Kohut, *Russian Centralism and Ukrainian Autonomy : Imperial Absorption of the Hetmanate 1760s-1830s* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988), pp.125-190; Horak, "Russian Expansion," p.118.

エカチェリーナは1764年にウクライナの自治を廃止し、ヘティマンシチーナは消滅した。1728年に一時閉鎖されたマロロシア参議会が再びフルヒフに設置された(27)。この第二コレギヤは4人のロシア人役人と4人のスタルシーナから成り、マロロシア総督となったП.А.ルミャンツェフが会長を兼任した(28)。最後のヘティマンとなったロズモフシキーはウクライナから追放される。1775年にザポリッジャ最後のノヴァ本営がロシア軍によって破壊され、ザポリッジャ・コザークは一掃された(29)。南部地域もまたポチョムキンの下で県政に組み込まれていくこととなる(30)。

以上の経過をたどると、ヘティマンシチーナのロシアへの併合は必ずしもウクライナ人の意に反して行なわれたわけではなかったといえる。ペレヤスラフ条約締結の際にロシアへの忠誠を喜んで誓った人々がおり、またアンドルシフ条約で外部から東西に分割される以前に、ヘティマンシチーナは親ロシアと親ポーランドに内部分裂を起こしていた。さらにヘティマンとスタルシーナの対立はウクライナとロシアの対立に劣らず深刻なものであった。

またロシアがウクライナに苛酷であったと同様に、ウクライナの特権階級もまたウクライナ人に対して権勢を振るった。ウクライナの支配者層がロシアの干渉を排除しようとしたのは、彼ら自身の権力が制限されるのを怖れたためであり、彼らはウクライナのために戦ったというよりむしろ、ウクライナにおける覇権をロシアと争ったのであった(31)。ヘティマンシチーナのウクライナ人農民を苦しめたのはマロロシア・コレギヤではなく直接の領主であるスタルシーナやシュリャフタや聖職者であり、農民暴動は彼らに向けられたものであった(32)。またロシア人役人が不従順な農民を厳罰に処そうとするスタルシーナをとどめようとした例

27　1786年に閉鎖。

28　ロズモフシキーの管轄であったザポリッジャもマロロシア総督管轄となる。

29　コザークの多くはドナウ流域に逃亡した。ザポリッジャ本営オタマン（首長）のカルヌィシェフシキーはクリム・ハン国やオスマン帝国との戦争での功績が大きかったため、ポチョムキンのとりなしで死刑を免れ、ソロヴェツキー修道院に送られてその地で生涯を終える。

30　1775年、県行政の改革が実施され、ウクライナにおける従来の連隊と中隊の行政単位は廃止され、ノヴォロシア地域はアゾフ県とノヴォロシア県の2県となった。1780年、スロヴィド・ウクライナ県がハルキフ総督管区（наместничество）となる。1781年までに左岸ウクライナにはキーイフ・チェルニヒフ・ノヴォホロド・セーヴェルの総督管区が設置され、ルミャンツェフが3総督府を統括した。さらに南部には1783年にカテリノスラフ総督府が設置され、クリム・ハン国の併合直前のウクライナには5総督管区（ハルキフ、キーイフ、チェルニヒフ、ノヴォホロド・セーヴェル、カテリノスラフ）が存在したことになる。*Дружинина Е.И.* Северное Причерноморье в 1775-1800 гг.. М., 1959. С.8（карта1), 53-57; *Верстюк и др.* Україна від найдавніших часів. С.95-97（前注8参照）.

31　例えば、ヘティマンのスコロパツキーはマロロシア・コレギヤの設置に反発して憤死したが、ピョートル1世から多くの領地を受け取り、18世紀初めのコレギヤ設置以前において最大の土地所有者であったのは他ならぬ彼自身であった。そして彼に次ぐ大土地所有者は、当時連隊長であった、のちのヘティマンのポルボトクとアポストルだった。当時ピョートルは、ウクライナ支配者層の政治権力を制限した代わりに気前よく土地を分け与えて彼らの財産を保護し、多くのウクライナ有力者がその恩恵に浴していたのである。またスコロパツキーは反抗的な農民に対する体刑などの懲罰を領主に奨励し、他の村や町への移動を禁じるなどポスポルィティに対する統制を強めた。ペテルブルグ建設やヴォルガ-ドン運河建設などの重労働に大勢のウクライナ・コザークを提供したのも彼であった。また最後のヘティマンであるロズモフシキーは司法改革を行ない、コザークの子弟に対する義務教育を導入する一方で、農民の移動を制限し領主の利益を保護した。*Мельник.* Гетоманщина. С.94, 98, 101, 109-110; *Підкови, Шуста.* Довідник. С.662, 768.

32　スコロパツキーの統治の終わり頃には農民たちの暴動が最高潮に達して領主たちは怯え、彼は各領主たちに行動を慎むよう厳しい布告を出したほどであった。*Мельник.* Гетоманщина. С.110.

もあった(33)。18世紀前半からウクライナ南部地域にポーランドやヘティマンシチーナから逃亡農民が大量に移住したのはそのような事情があったためで、農民もまた最終的には新天地を求めて移住するという合理的な道を選んだのであり、その勢いはロシア政府による外国人入植の規模をはるかに上回ったのである(34)。

ザポリッジャ・コザークはロシアの支配下に入った後、北方戦争ではマゼパについてロシアに反旗を翻したものの、オスマン帝国やクリム・ハン国との戦争ではロシア軍とともに戦い、またノガイを味方につけようとする外交政策に協力するなどロシアのクリム・ハン国併合に大きな役割を演じた(35)。そしてその役目が終わると自らもザポリッジャを追われることとなる。

またマロロシア・コレギヤが一時閉鎖されたり、廃止されたヘティマンの選挙が再開されるなど、自治の制限が緩和された時期や、ロシア側がヘティマンやスタルシーナらウクライナの有力者層の勢力に警戒を示していた時期があった。ピョートルからエカチェリーナに至るまで、ウクライナへの締め付けが時間の経過とともに強まっていったわけではなかった点にも着目すべきであろう。

2．クリム・ハン国の併合

ここでは主にAlan W. Fisher(36)の一連の研究に依拠しつつ、ロシアがクリム・ハン国を併合し、ノヴォロシア3県のひとつターヴリヤ県とするまでの過程を追う。

テュルク系民族が進出していた黒海北岸にモンゴル・タタールが登場したのは13世紀半ばのこととされる。クリミア半島とその周辺のステップ地帯はジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）とモンゴル帝国の西部に組み込まれた。15世紀半ばまでにジョチ・ウルスから分裂して、ヴォルガ流域北部にカザン・ハン国、ヴォルガ流域南部にアストラハン・ハン国、そしてクリミアにハジ・ギレイ率いるクリム・ハン国が誕生した。クリム・ハン国の初代ハンのハジ・ギレイは自らをチンギス・ハンの末裔と称しており、ギレイ家は1783年にロシアに併合されるまで途切れることなく続いたハンの家系であった。ハジ・ギレイはジョチ・ウルスの四大有力貴族であるシリン家、バリン家、キプチャク家、アルギン家を伴っ

---

33 *Гуржій, Чухліб.* Гетьманська Україна. С.83.

34 1750年代からロシアはウクライナ南部にセルビア人連隊を入植させ、「ノヴァ・セルビア（Нова Сербія）」と「スロヴャノセルビア（Слов'яносербія）」が形成される。しかし移民の数は増えずにセルビア人入植政策は事実上失敗に終わり、逆に1750－60年代にポーランドやヘティマンシチーナからの逃亡農民の入植が進み、外国人移住者を上回る勢いでウクライナ人の人口が増加した。セルビア人入植地はわずか10年で新設のノヴォロシア県に編入される。*Кабузан В.М.* Заселение Новороссии (Екатеринославской и Херсонской губерний) в XVIII - первой половине XIX века (1719-1858 гг.). М., 1976. С.52-53,83-100.

35 ザポリッジャ・コザークとクリム・タタールは戦火を交える一方で、盛んに交易を行なっており、経済的・文化的に緊密な関係にあった。*Зінченко Ю.І.* Кримські татари: історичний нарис. Київ, 1998. С.48-49.

36 Fisherは当時のロシア外交文書や書簡のみならず、トルコ語史料・文献を用いることで、軽視されがちなクリム・ハン国内の情勢に切り込み、ロシア・クリミア間関係を重視した立場でクリム・ハン国併合をとらえた。またクリム・タタール研究の業績も大きい。彼に先立つクリム・ハン国の主な研究者には、18世紀末ではИ.Э. Тунманн, 19世紀末ではВ.Д. Смирнов, Н.Ф. Дубровин, Ф.Ф. Лашков, Ф.А. Хартахай, 20世紀はじめではН.Л. Эрнст, А. Крымскийなどがいる。

てクリミアへ移住した[37]。1552年カザン・ハン国が、1556年アストラハン・ハン国がモスクワに併合されるなか、クリム・ハン国が生き延びることができた理由の一つは、このような有力貴族を取り込むことに成功したためとされる。しかし貴族たちの勢力が強かったことは、国内の混乱を招き、ロシアやオスマン帝国に付け入る隙を与えた重大な要因となる[38]。

ハジ・ギレイとその息子たちのヌルデヴレトとメングリ・ギレイの統治下で、リトアニアと同盟してカザン・ハン国を併合したモスクワに対抗したり、モスクワのイワン３世と同盟してポーランドやジョチ・ウルスと敵対するなどの外交関係を展開していたが、オスマン帝国の従属国となった1475年が大きな転換期となる[39]。オスマン帝国はケフェを含むクリミア半島南岸に州（エヤーレト）を設置し、イスタンブルから派遣されてきたベイレルベイ（州知事）に統治させた。オスマン帝国は黒海北岸に要塞化した諸都市を建設し、アザク（アゾフ）、ケフェ、ケルチ、オズィ（オチャキフ）などに大規模な駐屯軍を置いた。またクリム・ハン国の軍はオスマン帝国の遠征の際に召喚に応じなければならなかった[40]。このようにクリム・ハン国はオスマン帝国の北方防衛線の役割を果たすこととなった。スルタンは1,200人の護衛隊をハンのもとに派遣していたが事実上はハンの監視役であったとされ、彼らの給与はオスマン帝国の国庫から支出された。また新しいハンが国内で選出されたのちはスルタンによる承認を受けなければならなかった。しかし一方で、クリム・ハン国はスルタンから毎年多額の贈与金を受け取り、オスマン帝国下のドナウ二公国（モルドヴァとワラキア）から貢納金が支払われるなどオスマン帝国の保護による恩恵を享受していたといえる[41]。

クリム・ハン国においてハンは絶対君主ではなく、対外的にはオスマン帝国のスルタンの支配下にあり、内政の実権を握っていたのは有力貴族であった[42]。彼らはギレイ家と同様に

37　特にシリン家とバリン家が有力であった。16世紀初めにこの四大貴族の他にマンスル家が勢力を伸ばしてくる。 Beatrice F. Manz, “The Clans of The Crimean Khanate,1466-1532,” *Harvard Ukrainian Studies* 2:3 (1978), p.284.

38　Alan W. Fisher, *The Russian Annexation of the Crimea 1772-1783* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970), p.2; Alan W. Fisher, *The Crimean Tatars* (California: Stanford University, Hoover Institution Press, 1978), pp.5, 7.

39　クリミアがまだビザンティン帝国下にあった頃から、黒海・アゾフ海沿岸にはジェノヴァやヴェネチアなどからイタリア人が進出し、ドナウ川河口のリコストモ、ドニステル川河口のモンカストロ、クリミア半島南岸のチェムバロ、ケフェ（カファ）などの諸都市に商館を築いてイタリア本国やトレビゾンド帝国などを相手に貿易を行なっていた。メングリ・ギレイはケフェを統治下に置こうとしてスルタンのメフメト２世に援助を申し入れ、1475年両国の同盟軍がケフェを攻撃し、ジェノヴァ人を追い払う。翌年、オスマン寄りのクリム・ハン国有力貴族のシリン家率いる軍がオスマン帝国のモルドヴァ遠征に参加し、これがクリム・ハン国のオスマン帝国に対する主従関係の始まりとなる。その間兄弟のヌルデヴレトによるクーデタによってメングリはイスタンブルに亡命してスルタンに助けを求め、この要請をオスマン帝国側が受け入れたことによりオスマン帝国とクリム・ハン国の公式な関係が成立し、クリム・ハン国はオスマン帝国の保護下に入ることとなった。*Карпов С.П.* Итальянские морские республики и Южное Причерноморье в XIII-XV вв.: проблемы торговли. Москва, 1990. С.98,260-276; *Смирнов В.Д.* Крымское ханство под верховенством Отоманской порты до начала XVIII века. СПб., 1887. С.260-261, 294; Fisher, *The Russian annexation*. pp.3-4.

40　ケルチ海峡を挟んだクバン側のタマニはオスマンのカフカース派遣軍の拠点であった。オルカピシ（ペレコプ）やイェニカレにはより小規模な部隊が駐屯しており、オルカピシ駐屯軍は北のステップを、イェニカレ駐屯軍はカフカースの動きを監視していた。Fisher, *The Russian Annexation,* p.14; *Андреев А.Р.* История Крыма: Князь Долгоруков-Крымский. М., 2000. С.140-141.

41　その他ポーランドやコザーク集団からも貢納を受け取っていた。Fisher, *The Russian Annexation,* p.7.

42　*Андреев.* История Крыма. С.125; *Зінченко.* Кримські татари. С.35.

ジョチ・ウルス時代からの伝統的勢力であり、半ばハンから独立していた。特に勢力を誇ったのはシリン家で、都市カラスバザールを本拠地とし、オスマン帝国領以外のクリミア半島東部を統治下に置いていた。その他の貴族も広大な土地を所有し、オスマン帝国領以外のクリミア半島のおよそ半分が貴族領であったとされる。貴族と同様に特権階級であったのは聖職者であった。クリム・ハン国における最高の宗教指導者ムフティーはウラマー（イスラーム法官）たちによって選出され、広大なモスク領の統括者でもあった(43)。彼らに続く地位にいたのはカザスケル（軍人法官）で、彼らはオスマン帝国による指名と承認を受けて任官した(44)。ノガイ・オルダ（部族）もまたクリム・ハン国の重要な構成員であった。彼らは北カフカースからアストラハンそしてアゾフ海沿岸にかけてのステップ地帯に遊牧していたが、1556年にアストラハン・ハン国がモスクワに占領された際に多くのノガイ人がクリム・ハン国に移住してきた(45)。ノガイを統括するためにハンはセラスケルと呼ばれる統治者を任命していたが、ノガイはクリム・タタールと常に一定の距離を保ち、しばしばハンに対して反乱を起こした。国政にかかわる決定はディーヴァーヌ（会議）で下された。この会議にはギレイ家（ハン、カガン、ヌレッディン）(46)、ノガイ代表のセラスケル、貴族の代表としてシリン家のベイ（一族の長）、カザスケルが参加し、シリン家のベイとオスマン代表のカザスケルが同意した場合にのみ、会議での決定は実行に移され、ギレイ家の三人は意見を受け入れるだけであった(47)。

クリム・ハン国がオスマン帝国の属国になったのち、モスクワとの関係は悪化することとなる(48)。ロシアがオスマン帝国とクリム・ハン国に対して攻勢に出るのはピョートル１世時

---

43 それぞれのモスクが所領を有しており、1783年にはクリミア半島に1,500以上のモスクがあり、モスク領は広大であったとされる。Fisher, *The Russian Annexation*, p.9.

44 クリム・ハン国はオスマン帝国と同様に多くの小さいカザ（郡）に分けられ、それぞれのカザにカーディーが置かれ、カザスケルが統括した。Fisher, *The Russian Annexation*, p.9; 鈴木董『オスマン帝国　イスラム世界の「柔らかい専制」』講談社現代新書1097、1992年、199, 200頁；林佳世子『世界史リブレット19　オスマン帝国の時代』山川出版社、1997年、37頁。

45 ブヂャク・オルダはのちのベッサラビア南部（ドニステル川・ドナウ川河口周辺）に展開し、エディサン・オルダはオチャキフ地域（ボク川・ドニステル川間）に、ジャムブルク・オルダはザポリッジャに近いウクライナ南部ステップ、そしてエディチクル・オルダはウクライナ南部ステップから黒海沿岸までを領域としていた。彼らは半島を除くクリム・ハン国のほぼ全土に展開し、人口のおよそ40%を占めた。*Скальковский А.А.* О Ногайских Татарах, живущих в Таврической губернии. СПб., 1843. С.5-6; *Тунманн И.Э.* Крымское Ханство. Симферополь, 1991. С.42-57; Fisher, *The Russian Annexation*, p.12.

46 ギレイ家からはハンの他に補佐役のカルガ・スルタンとヌレッディン・スルタンが選出された。ハンの兄弟・息子たちがこのカルガやヌレッディンに選ばれたため、クリム・ハン国ではハンの地位を争う肉親同士による陰謀や謀殺が伝統となっていたという。*Зінченко.* Кримські татари. С.35.

47 実際にはこの会議では行政の問題より主に軍の遠征への参加についての決定が行なわれたとされる。遠征の指揮はハンがとったとされる。Fisher, *The Russian Annexation*, pp.14-15.

48 毎年モスクワからロシア大使がバフチサライを訪れ、ハンに貢納金を納めた。1613－1651年の38年間に少なくとも30人のロシア大使がバフチサライを訪れ、ハンに納めた金額は36万3970ルーブリであったとされる。またロシアに対するクリム・タタールの襲撃が頻発し、毎年多くのロシア人やウクライナ人が捕らえられてケフェからオスマン帝国に売られたり献上されたりした。1601－1655年の54年間におよそ15－20万人のスラヴ人がクリミアに連れ去られたとされる。ただしケフェについては奴隷貿易のみが強調されやすいが、農作物や魚や肉、工芸品などの輸出も同様の割合を占めていたとされる。Fisher, *The Russian Annexation*, pp.19-20; Alan W. Fisher, "The Ottoman Crimea in the Sixteenth Century," *Harvard Ukrainian Studies* 5:2 (1981), p.139.

代であった(49)。アンナ・イワーノヴナ治世の1735－39年に本格的なロシアとの戦争がクリミアで始まった。1739年のロシアとオスマン帝国間のベオグラード講和条約で、要塞を建設せず艦隊を配備しないという条件つきでロシアはアゾフを獲得した(50)。

クリム・ハン国に対する強硬な姿勢をあらため、和平を保ちつつ徐々にロシアの支配を浸透させようという路線に転じたのはエカチェリーナ２世であった。強硬派のM.И. ヴォロンツォフではなくH.И.パーニンが穏健な対クリミア外交を推進することとなり、彼はザポリッジャ・コザークを仲介としてクリミアと交渉し、1763年にバフチサライへのロシア総督の駐在をハンに認めさせることに成功した(51)。しかし1765年に総督ニキフォロフはハンによって追放され、1768年に第一次露土戦争（1768－1774年）が開始される。それでもエカチェリーナはクリム・ハン国を完全併合しようと意図していたわけではなく、クリム・ハン国をオスマン帝国から独立させてロシア側につけようという外交政策が続行された。エカチェリーナは、まずノガイを味方につけるようにパーニンに命じ、彼の要請を受けたザポリッジャ・コザーク首長のカルヌィシェフシキーは仲介役としてエディサン・オルダのジャン・マムベト・ベイと交渉し、ロシア側につくように説得にあたった。そして1770年、まずドニプロー以西のエディサンとブヂャクが、つづいて東部オルダのエディチクルとジャムブルクのノガイがロシア側につくことに同意し、カルヌィシェフシキーとジャン・マムベト・ベイにエカチェリーナから多額の報奨金が支払われた(52)。ロシアは彼らのクバン川以北地域への移住を認め、そして翌1771年そこにノガイの独立国家を建設するという協定を交わした(53)。

これと平行してロシアはクリム・ハン国との交渉を行い、クリム・ハン国の独立と贈与金の支払いを約束し、さらにノガイをハンの支配下に置くことを保障するという二重外交を展開した。しかしオスマン帝国はハンに対して多額の金を与え続けており、またクリム・ハン国はオスマン帝国の報復を恐れていたため交渉は難航した。貴族や宗教指導者といった有力者層は権力を失うのを怖れ、ロシアの影響下での独立を歓迎しなかった。最有力貴族のシリ

49　1696年ロシア軍はアザクを占拠し、黒海に進出した。1683年の第２次ウィーン包囲に失敗したオスマン帝国は1699年のカルロヴィッツ条約でハプスブルグ帝国にハンガリーやトランシルヴァニアを奪われ、ロシアに奴隷貿易を廃止させられ、クリム・ハン国への貢納金を要求しないことに同意させられた。1672年のブチャチ条約ではポーランド王国から割譲されたポディルを奪回された。1711年にプルート戦役で敗北したことにより、ロシアはアザクを返還することになる。Alan W. Fisher, “Azov in the Sixteenth and Seventeenth Centuries,” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 21:2 (1973) p.172; *Андреев.* История Крыма. С.207-208.

50　ロシア軍はクリミアに侵攻し、バフチサライなどの諸都市を焼き払った。一時撤退したのち今度はオスマン帝国の北の重要拠点であるオズィ（オチャキフ）を占領する。 *Андреев.* История Крыма. С.209-212.

51　ヴォロンツォフはオスマン帝国とクリミアの危険性を訴える強硬案を提示したが、性急なクリミアの完全併合ではなく、ロシアへの従属かオスマン帝国からの独立を提唱した。クリミアへのロシア大使の駐在を進言したのも彼であった。 *Кессельбреннер Г.Л.* Крым: страницы истории. М., 1994. С.12,14; *Дружинина Е.И.* Кючук-Кайнарджийский мир 1774 года (его подготовка и заключение). М., 1955. С.65-68; Fisher, *The Russian Annexation*, pp.27-28.

52　*Лашков Ф.Ф.* Шагин-Гирей, последний крымский хан: Исторический очерк. Симферополь, 1991. С.6-7. 1770年７月にパーニンがドニステル河岸のベンデル要塞を占領したとき、ノガイ代表がエディサンとブヂャク・オルダの有力者たちの署名入りの書状を携えて彼のもとを訪れたとされる。*Скальковский.* О Ногайских Татарах. С.17-18.

53　*Кочекаев Б.-А.Б.* Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. Алма-Ата, 1988. С.173-174.

ン家は裏で活発にオスマン帝国との交渉を行なっていた(54)。クリム・ハン国にとってはオスマン帝国の庇護を離れてロシアの下に移らなければならない理由などなかったのである。ロシアはエディサン・ノガイのセラスケルであったシャヒン・ギレイをはじめとするわずかな勢力を寝返らせることに成功したが、ハンとロシアとの同盟はついに結ばれないまま1771年にロシア・ノガイ軍のクリミア侵攻が開始されることになる。

1771年、B.M.ドルゴルーキー率いる3万人のロシア軍と6万人のノガイ軍がクリミア半島に進攻した。バフチサライは陥落し、セリム・ギレイは降伏した。セリム・ギレイは自らのクリミアにおける支配権を認めるようにロシアと交渉を開始し、ロシアもまたハンに退位を迫ったわけではなかったが、彼は突然自ら退位してオスマン帝国に亡命してしまった。新しいハンにサヒプ・ギレイが選出され、その兄弟のシャヒン・ギレイはカルガ・スルタンとなった(55)。シャヒン・ギレイがタタールの代表団を率いてペテルブルグを訪れ、エカチェリーナに謁見した際、女帝は若くて教養のあるシャヒンを大いに気に入ったとされる(56)。このシャヒン・ギレイこそが、のちにエカチェリーナがクリム・ハン国の近代化をたくし、クリム・ハン国史上ただ一人の専制的なハンとして急進的な改革を断行する人物であった。

1772年にクリム・ハン国内やノガイ人の間で反ロシア勢力が行動をおこし、オスマン帝国からの干渉もあって情勢は混乱したが、ロシアはようやく11月にハンとの条約の締結にこぎつけた。カラスバザール条約はロシア代表のシチェルビーニン（パーニンの後任）とハンのサヒプ・ギレイ、シリン家とマンスル家のベイ、ノガイ全4オルダ（エディサン、エディシクル、ジェムボイルク、ブヂャク）の各代表によって締結された(57)。この条約は、ロシア帝国と新しいクリム・ハン国との「同盟と恒久の友好」を謳ったもので、クリム・ハン国の宗教、法律、自由を侵害するものではなかった。ロシアはオスマン帝国とは異なり、クリム・ハン国に対していかなる戦争の参加も強制しないとした。ハンはすべての行政権をにぎり、クリミアのすべての共同体から自由に選出され、その手続きに関してはロシアもオスマン帝国も干渉しないが、あらゆる選挙の結果はロシア政府に報告されるものとされた。ハンの統治はハン国のすべての住民に及ぶとされ、親ロシアのジャン・マムベト・ベイの影響下にあったノガイはクリム・ハンの支配権を認めた(58)。ロシア人には商業・貿易において特権が付与され、ハンの宮廷に大使の駐在が認められた。またケルチやイェニカレにロシア駐屯軍が配置されたが、これはムフティーやウラマーといった宗教指導者層の反発を買ったため、ロシアは多額の補償金を支払って彼らの怒りを静めなければならなかった(59)。

1774年、ブルガリアのキュチュク・カイナルジャでオスマン帝国とロシアの間に和平条

---

54 Fisher, *The Russian Annexation*, p.49.

55 *Лашков*. Шагин-Гирей. С.9.

56 シャヒンは幼少時からヴェネチアでイタリア語やギリシャ語を学び、西欧の習慣を身につけていたとされる。またアラビア語に通じ、フランス語の知識もあったとされる。およそ2ヶ月のペテルブルグの滞在の間、エカチェリーナや政府高官たちの関心をひきつけることに成功した。 *Лашков*. Шагин-Гирей. С.5-6; *Кессельбреннер*. Крым: страницы истории. С.17-23.

57 Fisher, *The Russian Annexation*, p.50; *Кочекаев*. Ногайско-русские отношения. С.183.

58 ジャン・マムベト・ベイはロシアから数千ルーブリを受け取って反ロシア派を抑えるために活動した。Fisher, *The Russian Annexation*, p.48.

59 Fisher, *The Russian Annexation*, p.46.

約が締結された(60)。クリム・ハン国はオスマン帝国から離れ、ロシアもオスマンもハンの選出や内政などに干渉しないことが定められた。オスマン帝国はブク川とドニステル川間（オチャキフ地域）をクリム・ハン国に、ケルチやイェニカレなど黒海沿岸の要衝の多くをロシアに譲ったが、ドナウ二公国は取り留めた(61)。またオスマン帝国はクリム・ハン国の宗教的宗主権を獲得することに成功し、クリム・ハン国にとってはカラスバザール条約で認められた独立が事実上制限される結果となった(62)。

こうして1783年に完全併合されるまでのおよそ9年間のクリム・ハン国の「独立時代」が始まった。クリム・ハン国をオスマンから引き離してロシアの保護下に置くことに成功したエカチェリーナは、親ロシアのシャヒン・ギレイをハンとして擁立するつもりでいた。しかし1775年、スルタンに支持されたクバンのデヴレト・ギレイが反ロシア派とともに反乱を起こし、クリミアに侵攻してハンの座を奪い取った。ロシアはデヴレト・ギレイのクーデタを表向きには受け容れた。一方シャヒン・ギレイはクバンのノガイを統括するハンとなって、クリミアで政権を握る機会を窺っていた(63)。1776年末スヴォーロフ率いるロシア軍がクリミアに侵攻し、翌1777年にシャヒン・ギレイを即位させることに成功した(64)。ロシアの支配を嫌った数百の貴族たちはイスタンブルに亡命し、デヴレト・ギレイもその後に続いた。こうしてついにクリム・ハン国に親ロシア政権が誕生したのである。

新しいハンは早速クリム・ハン国の近代化をめざす改革に着手した。まずはこれまで国の実権を握ってきた有力貴族から勢力を奪い、ハンの専制を確立することから始める必要があった。シャヒンはハンの継承をこれまでの選挙制から世襲制にし、ディーヴァーヌからハンを支持しない者を締め出した。ムフティーやウラマーなどの宗教指導者やカーディーやカザスケルなどの世俗権力者もハンの支持者で固められた。クリム・ハン国の二大貴族のシリン家とマンスル家は彼を支持し、ディーヴァーヌには彼らだけが参加した(65)。

税制度や土地制度も大きく変化した。これまで聖職者が所有していた広大なワクフ領（宗教寄進地）やモスク領は没収され、農民に分配された。そしてこれまでは貴族、農民、聖職者、非ムスリムなど全ての国民から収入に応じて徴税するシステムが導入された(66)。また軍の近代化に取り組み、ロシア軍を手本にして西欧式の常備軍や精鋭護衛隊の創設を目指した。のちにオスマン帝国のセリム3世（在位1789－1807年）が「ニザーミ・ジャディード（新制）」という軍の近代化改革を実施しようとしてアーヤーン（地方有力者）やイェニチェ

60　カラスバザール条約締結後もロシアはまだ多くの問題を抱えていた。1773年ハンのサヒブ・ギレイが突然ロシア大使を捕らえ、彼の全財産を没収した。またオスマン帝国のスルタンは、オスマン帝国の亡命者で元クリム・ハンのデヴレト・ギレイをクバンに送り込み、ノガイなどの反ロシア勢力に接触させた。さらに1773年からプガチョフの乱が始まり、クバンのデヴレト・ギレイとウラルのプガチョフが同盟するのを恐れたロシアはオスマン帝国との戦争を早く終結させ、この反乱を鎮圧する必要に迫られた。Fisher, *The Russian Annexation*, pp.53-55.

61　*Дружинина.* Кючук-Кайнарджийский мир. С.279-282.

62　Fisher, *The Russian Annexation*, p.55.

63　Alan W. Fisher, "Şahin Girey, the Reformer Khan, and the Russian Annexation of the Crimea," *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 15:3 (1967) pp.346-347.

64　*Кессельбреннер.* Крым: страницы истории. С.31-35.

65　デヴレト・ギレイはディーヴァーヌを廃止し、不満を抱いていた貴族たちはシャヒンの即位を初めは歓迎し、クリミアの住民も新しいハンを受け容れた。Fisher, "Şahin Girey," p.350; *Лашков.* Шагин-Гирей. С.20.

66　Fisher, "Şahin Girey," pp.351-352.

リ（常備歩兵軍団）の反発を買って殺害される[67]。シャヒンの軍の近代化はこのオスマン帝国の改革より20年先を行く試みであったが、予算の不足などから予定よりはるかに小規模な軍となった。一方シャヒンはキリスト教徒[68]に対する優遇措置を採り、キリスト教教会の土地は押収せず、また軍においてムスリムとキリスト教徒を同等に扱った。これはムスリムの反発を招き、タタール人と正教徒（特にギリシャ人）との対立を生んだ。シャヒンがキリスト教徒ではないかという噂が流れ、オスマン帝国は彼を反ムスリムとして非難した[69]。

ロシア側は急進的な改革の実行に懸念を表明したが強硬措置はとらず、即位からわずか半年でハンに対する不満が暴動や反乱となって噴出した。バフチサライではハンの宮殿が焼き討ちされ、正教徒商人の虐殺事件が起こり、新しいロシア式の武器を手にしたハンの護衛隊までもが反乱に加わった。反撃に出たロシア軍と「アルバニア人」[70]はケフェを攻撃し、女性や子供を含むタタール人600人を殺害したとされる[71]。クバンではシャヒンの兄弟たちがオスマン帝国と接触した。オスマン帝国は元ハンでイスタンブルに亡命していたセリム・ギレイをハンに任命し、1778年３月に艦隊をクリミアに向かわせるがロシア軍に撃退された。この1777－78年の反乱はロシア軍によって鎮圧される[72]。

その後もクリム・ハン国の状況は好転しなかった。ルミャンツェフはクリミアの正教徒のノヴォロシアへの移住を計画し、1778年に主にアゾフ海沿岸に３万人を超すキリスト教徒が入植した[73]。改革の唯一の支持基盤であったキリスト教徒を失ったことはシャヒンにとっては大きな痛手であった。経済的な影響も大きく、黒海貿易高は低下した。一方オスマン帝

---

67 Fisher, “Şahin Girey,” p.351; 永田雄三、加藤博『地域からの世界史８　西アジア・下』朝日新聞社、1993年、112-113頁。

68 クリム・ハン国の正教徒（ギリシャ人、アルメニア人、グルジア人など）はクリミア半島南岸の諸都市の特別区や都市の郊外に独自の共同体を形成していたとされ、主に商業や海運業、銀行業などに従事していた。18世紀半ばには、商業・貿易の中心地であったケフェにはおよそ6,000人の非ムスリムが居住していたとされ、1756年のケフェには８つのキリスト教教会があったとされる。またキリスト教徒の他にユダヤ教徒の民族集団であるカライムやクリムチャクがおり、18世紀末のバフチサライには二つのシナゴーグがあった。Fisher, *The Russian Annexation*, p.13; Fisher, *The Crimean Tatars*, p.29; *Ачкинази И.В.* Крымчаки (Проблемы формирования общности и ее этническая история до 1913 г.): Дис...канд. ист. наук. Симферополь, 1999. С.5.

69 *Кочекаев.* Ногайско-русские отношения. С.201; Fisher, *The Russian Annexation*, p.95.

70 露土戦争中の1770年にバルカンのモレア（ペロポネソス）半島のギリシャ人がA.オルロフ将軍の艦隊に加わってオスマン帝国に反旗を翻した（オルロフ戦争）。この蜂起は広く波及せずに終わったが、オルロフは1775年に1,200人を超すバルカンの正教徒を伴って帰還した。エカチェリーナはシャヒン・ギレイ統治下のクリム・ハン国のケルチやイェニカレに彼らを入植させた。その多くはギリシャ人であったがロシア人は彼らを「アルバニア人」と呼んだとされる。佐原徹哉「オスマン支配の時代」柴宜弘編『新版世界各国史18　バルカン史』山川出版社、1998年、151頁；永田、加藤『地域からの世界史８』111頁； Fisher, *The Russian Annexation,* pp.90-91.

71 Fisher, *The Russian Annexation,* p.94.

72 *Лашков.* Шагин-Гирей. С.28; Fisher, *The Russian Annexation*, p.95.

73 主にアゾフ海北岸のマリウポリにギリシャ人が大規模に入植した。*Дружинина.* Северное Причерноморье. С.57（前注30参照）; *Гедье А.В.* Переселення греків з Криму до Приазов'я у 1778 р. // Український історичний журнал. 2001. №1. С.89. しかし移住の道中で大勢が死亡したりクリミアへ戻ったりした。またロシア側の不備から２年にわたって移住先が決定せず、食糧や住居などの不足で数千人が死亡した。1780年に新天地への不満からクリミアへの帰還をめざす大規模な動きが起こり、ロシアはそれをとどめるために軍を出したとされる。*Араджиони М.А.* Историография этнической истории и культуры греков Северного Приазовья (80-е гг. XVIII в.- 90-е гг. XX в.): Дис...канд. ист. наук. Симферополь, 1995. С.109; *Гедье А.В.* Греки Північного Приазов'я (1778-1875 рр.): Дис...канд.ист.наук. Донецьк, 1997. С.120-123.

国は1778年８月に再び艦隊をクリミアに差し向けるが、またしてもロシアに上陸を阻まれて撤退する(74)。1779年にロシアとオスマン帝国はアイナリ・カヴァク協定を締結し、これによってクリミアからロシア駐屯軍は撤退し、キュチュク・カイナルジャ条約でクリム・ハン国領となったオチャキフ地域がオスマン帝国に返還されることとなった(75)。頼みの綱であったロシア軍がクリミアを去り、シャヒンはさらに孤立を深めることとなる。1780－81年にクバンのノガイ人とカフカースのチェルケス人が反乱を起こし、そして1782年オスマン帝国の支持を受けたギレイ家の兄弟たちのクーデタによってシャヒンはハンの座を追われ、ロシア軍に護衛されながらケルチに逃れた(76)。

しかしエカチェリーナはシャヒン・ギレイを支持し続けた。内乱の鎮圧を命じられたポチョムキン軍はクリミアに進攻して反乱を収め、再びシャヒンをハンの座に据えた。しかしロシア側の制止にもかかわらず、シャヒンはわずかに残った護衛隊で反乱者に対する抑圧を開始した(77)。ポチョムキンは1783年３月にペテルブルグに戻ってクリミア併合を進言し、エカチェリーナはついに決断する。1783年４月にクリミア併合が宣言され、クリミアもノガイも忠誠を誓約した(78)。クリム・ハン国領であるクリミア半島・南部ステップ地域・クバン川以北地域がロシアに併合され、クリム・ハン国は340年の歴史の幕を閉じた。1784年にはクリミア半島とステップ地域はターヴリヤ州（州都はシムフェローポリ）となる(79)。シャヒンはエカチェリーナの保護下でロシアに移住したが、1787年にオスマン帝国に亡命したのち、スルタンの命令によりロードス島で処刑される(80)。

エカチェリーナの周囲にはクリミア完全併合を主張する側近たちが存在したにもかかわらず、なぜ彼女がクリム・ハン国の近代化と独立を支持し続けたのか、理由はよくわかっていないとされる(81)。いずれにしてもエカチェリーナは早い段階からクリム・ハン国の完全併合を望んでいたのではなく、まず親ロシア政権の樹立を目論み、目をかけていたシャヒン・ギレイの近代化政策を支援し、急激な改革が内乱を招いて収拾がつかなくなった時点で併合を決意した(82)。一方、オスマン帝国は二度にわたって艦隊を差し向け、クバンの反ロシア・反体制勢力を扇動してクーデタを引き起こすなどの干渉を行なったが、クリミアの内乱はシャヒンの改革に対する不満など内的要因に基礎を置くところが大きかった。またオスマン帝国は、ロシアとその同盟国であるヨーゼフ２世のオーストリアを敵に回すのを怖れ、またカフカースでロシアが優勢であったこともあり、クリム・ハン国の併合を受け容れざるをえな

74　Fisher, *The Russian Annexation*, p.107.
75　*Дружинина.* Кючук-Кайнарджийский мир. С.362-363.
76　*Лашков.* Шагин-Гирей. С.30; *Кессельбреннер.* Крым: страницы истории. С.17-23.
77　*Лашков.* Шагин-Гирей. С.31-32; *Кессельбреннер.* Крым: страницы истории. С.45.
78　*Кессельбреннер.* Крым: страницы истории. С.70-72; Fisher, *The Russian Annexation*, pp.135,140.
79　ターヴリヤ州は1802年に県となる。クバン川以北地域には1792年から黒海コザーク軍が入植することとなる。
80　*Кессельбреннер.* Крым: страницы истории. С.76-78; *Лашков.* Шагин-Гирей. С.42.
81　Fisher, “Şahin Girey,” p.363.
82　エカチェリーナは1774年から併合までクリム・ハン国のために700万ルーブリ以上の援助金と無数の人命を費やしたとしている。Fisher, “Şahin Girey,” p.362.

かった[83]。次にロシアとオスマン帝国が戦火を交えるのは1787－91年の第二次露土戦争となる[84]。したがってクリム・ハン国の併合をロシアとオスマンの争奪戦におけるロシアの軍事的勝利として理解することは適切でない。

また、クリム・ハン国の伝統的な勢力や社会システムの根本的な変革を行なって国内の不満を招いたのは、ロシアではなくハンのシャヒン・ギレイ自身であった。かつてロシアはヴォルガ中流域やウラル地域を併合した際、マドラサを閉鎖しモスクを破壊しムスリム住民に改宗を強制した。このようなやり方は1708、1735、1739年のタタール人の暴動や、1755年の宗教指導者バトゥルシャー・アリが率いた反乱などの一因となった[85]。エカチェリーナはこの失敗を繰り返すことを怖れ、クリミア完全併合後でさえもムスリムの信仰・礼拝に干渉せず、ワクフ領にも大きく手をつけず、正教会は布教活動を差し控えたほどであった[86]。しかしその一方で、エカチェリーナはシャヒンの急進的な改革の実行を制止せず、内乱が激化し取り返しのつかない事態に陥るまで手を拱いていた。

クリム・ハン国が最後までまとまりを欠いたことは左岸ウクライナと同様であった。貴族や宗教指導者層は自らの権力に執着して保身に走り、タタール人もノガイ人も親ロシアと反ロシアに分かれ、一丸となってロシアの支配に抵抗したわけではなかった。したがってエカチェリーナの不可解で中途半端な保護干渉政策、シャヒン・ギレイの急激な改革の実施、そして内部分裂がクリム・ハン国を滅亡へと導いた主要因であった。このようにロシアによるクリム・ハン国の併合は独特のプロセスによるもので、一般的な意味での帝国主義的な領土併合とは性格を異にしていたといえる。

3．ベッサラビアの併合と統治

ここでは主に George F. Jewsbury の研究[87]に依拠しながら、モルドヴァ公国領の併合と完全併合までのベッサラビア統治について考察する。

83　クリミアへの対応に関してオスマン帝国のディーヴァーヌも常に保守派と強硬派が対立していた。Fisher, *The Russian Annexation*, pp.58, 106, 137-139, 153.

84　第二次露土戦争では、ポチョムキン率いるロシア軍が1788年にオズィ、1789-90年にハジベイを陥落させたが、1791年末のヤッシー条約締結を前にポチョムキンは世を去った。この条約でロシアはスヴォーロフ軍がイズマイルを落としたドナウ川河口までは領土を拡張できなかったが、オチャキフ州（ボク川とドニステル川の間）を併合し、国境はドニステル川に達した。この時点で1796年にノヴォロシア県となる領域がすべて併合されたことになる。1794年にオスマン帝国の要塞ハジベイがロシアの都市として完成し、翌年からオデーサと改称される。オチャキフ地域はノヴォロシアの一部となり、1802年からミコライーフ県（翌年からヘルソン県）の西部を構成することとなる。*Агаджанов* (*отв. ред.*). Национальные окраины. С.165-166.

85　1645－1755年にバシキール人の暴動は6回起こったとされる。Alan W. Fisher, "Enlightened Despotism and Islam under Catherine II," *Slavic Review* 27:4 (1968), pp.542-543.

86　ポチョムキンやИ.А. イゲリストゥロムのもとで比較的穏健なクリミア統治が行なわれたが、B.B. カホフスキーのようにモスクなどを破壊した統治者もいた。Chantal Lemercier-Quelquejay, "The Tatars of the Crimea : A Retrospective Summary," *Central Asian Review* 16:1 (1968), pp.16-17; Alan W. Fisher, "Social and Legal Aspects of Russian-Muslim Relations in the Nineteenth Century: The Case of the Crimean Tatars", in Abraham Ascher et al., eds., *The Mutual Effects of the Islamic and Judeo-Christian Worlds: The East European Pattern* (N.Y.: Brooklyn College Press, 1979), p.83.

87　George F. Jewsbury, "Russian Administrative Policies toward Bessarabia, 1806-1828," Ph. D. dissertation (University of Washington, 1970). この学位論文ではアルヒーフ文書は利用されていないが、Jewsburyは公

ベッサラビア（ドニステル川とプルート川の間）[88]を含む地域にルーマニア人の国家であるドナウ二公国が成立したのは14世紀であった[89]。ワラキア公国は1394年に、モルドヴァ公国は1394年にオスマン帝国の支配下に入ったが、モルドヴァのシュテファン大公やワラキアのヴラト４世（ドラキュラのモデルとして有名）などの強硬な抵抗によって、多額の貢納金や税を支払う代わりに自治国家としての地位を維持していた。両公国ではボイェリ（貴族層）から選挙によって公（ホスポダル）が選出されていた[90]。

1711年、ピョートル１世はバルカンからムスリムを追放するというアピールを行なってモルドヴァに侵攻した（プルート戦役）。しかしスウェーデンやフランスの支援を受けたオスマン帝国軍に大敗し、プルート条約でアゾフを失う。しかしこのときロシアはドナウ二公国と同盟を結び、これをきっかけにオスマン帝国はこの二公国の自治権を剥奪し、ファナリオットのニコラオス・マヴロコルダトスを両国の公とした。このときからドナウ二公国の公にはファナリオットが任命されることとなり、およそ100年に及ぶファナリオットの支配のもとでルーマニア人農民は搾取に苦しみ、農村は荒廃した。しかし一方では文化的な発展に貢献した公もいたとされ、ギリシャ語の使用が広まったことはルーマニア人の反感を買ったが、ギリシャ語を通してヨーロッパの知識や文化が普及し、民族意識の目覚めにつながったとされる[91]。ファナリオットと対立していたボイェリは勢力を伸ばしつつあったロシアに接近し、ロシアもまたドナウ二公国への野心を強めていった[92]。

1806年から新たにロシアとオスマン帝国の戦争が始まった。ナポレオンのフランスはオスマン帝国と結び、一方イギリスはロシアと同盟した。さらに1804年からバルカンではセル

刊史料や Ф.Ф. Вигель, Л.А. Кассо, А.Н. Накко などの資料を用いて、ロシアがベッサラビアの慣習・言語の違いや地元貴族の勢力といった障害に悩まされながら、困難な統治を行なった状況を明らかにしている。

88　ドナウ二公国ができる以前は、ギリシャ人、ローマ帝国、ヴィザンティン帝国、キーイフ・ルーシなどの影響下にあり、特に南部にはスキタイ人、ペチェネグ人、ポロヴェツ人などが展開し、1240年からはジョチ・ウルス領となる。 *Андреева Е.А.* Народоведение и этнография Бессарабии: сборник материалов. Измаил, 1996. С.6-8; *Лоза Ю.* Україна історичний атлас. 7клас. Київ, 1999. С.10-11,15.

89　1330年バサラブ（在位1310－52年）がハンガリー王カーロイ１世・ローベルトの軍を破ってワラキア公国をたて、1359年にボグダン公がハンガリー軍を撃退してモルドヴァ公国を建設したといわれている。金原保夫「中世のバルカン」柴編『新版世界各国史18』101-103頁。

90　特にワラキアでは、カトリックの覇権が強まる傾向を好まなかった人々からオスマン帝国の支配はむしろ歓迎されたとされる。オスマン帝国下のモルドヴァは1456年に併合されたモルドヴァ公国、1503年までに併合されたドニステル・ドナウ川間の河口地域、そしてこの南北の二地域に挟まれたブヂャクの３地域に分かれていた。金原「中世のバルカン」102-103頁；佐原「オスマン支配の時代」125頁；木戸蓊『世界現代史24　バルカン現代史』山川出版社、1977年、29頁；*Лоза.* Україна історичний атлас. 7клас. С.22.

91　佐原「オスマン支配の時代」146-147頁；木戸『世界現代史24』52頁；今井淳子「地域の内外ネットワーク　十九世紀バルカンにおける民族運動の展開」濱下武志、辛島昇編『地域の世界史1　地域史とは何か』山川出版社、1997年、302頁。

92　エカチェリーナ２世下の1768－74年のロシア・オスマン帝国戦争において、ロシア軍はドナウ二公国を制圧した。ロシアは1774年のキュチュク・カイナルジャ条約で両公国をオスマン帝国に返還するが、ヤシ（モルドヴァ）とブカレスト（ワラキア）にロシア総督を置くことと、二公国に対する助言を行なう権利を獲得した。またオスマン領内のキリスト教徒に対する保護権を獲得してバルカンへの足がかりを築いた。またビザンティン帝国を復興させて孫のコンスタンティンを帝位につけようとした「ギリシャ計画」がたてられた。しかしロシアは第二次露土戦争（1787－91年）においてもドナウ二公国を獲得できず、オチャキフ地域の併合にとどまった。Barbara Jelavich, *History of the Balkans: Eighteenth and Nineteenth Centuries* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), volume I, pp.110-112; Isabel de Madariaga, *Russia in the Age of Catherine the Great* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1981), pp.383-384,426; Andrei Popovici, *The Political Status of Bessarabia* (Washington, D.C.: School of Foreign Service, Georgetown University, 1931), p.59.

ビア蜂起が勃発しており、セルビア人もまたロシアと結んだ(93)。1806年末、ドナウ二公国に入ったロシア軍はヤシ（ヤッシー）やブカレストで歓迎を受けた。公国の住民たちはすぐにもオスマン帝国やファナリオットから解放されると期待したわけであったが、実際には戦争終結まで6年かかり、ロシア軍はその間ずっと両公国に居座り続けることとなる(94)。

ロシアによるこの6年間のドナウ二公国の統治は極めて不首尾なものであった。二公国ではファナリオット支配を避けて多くの農民は家や土地を捨てて逃亡し、農村は荒廃していた。やってきたロシア軍は補給の困難に直面し、食糧の購入に多額の出費を強いられることとなった(95)。またロシア人は現地の言語や習慣の違いに悩まされた。ホスポダルの下に設置されたディーヴァーヌが行政機関であったが、公文書は存在せず、命令は口頭で伝えられ、また成文化されていない慣習法が幅を利かせるなど、ファナリオットとボイェリが権勢を振いやすい仕組みとなっていた(96)。そして特権階級であるファナリオットとボイェリはロシア人の思い通りにはならなかった。ルミャンツェフは彼らを「二つの顔と心を持つヤヌスのようで、どちらも狡猾」と評した(97)。ロシアから二公国の統治のため派遣されたK.イプシランディスやC.C.クシニコフも同様にディーヴァーヌを完全に掌握できなかった(98)。イプシランディスはペテルブルグに召喚されたときにモルドヴァのディーヴァーヌに旅費の提供を要請したが断られ、無一文で出発しなければならなかった(99)。П.В.チチャゴフは両公国政府に軍を組織してロシア軍とともにナポレオンと戦うように呼びかけたが、その反応は冷ややかで、モルドヴァのディーヴァーヌは「モルドヴァの住民は二世紀以上も武器の所持を放棄しており、土地を耕すことしか頭にない」と返答した。またチチャゴフは現地の正確な地図を用意するように命令したが、誰も実行しなかった(100)。

1811年、アレクサンドルはドナウ二公国にクトゥーゾフを派遣し、戦争の終結と和平交渉にあたらせた。クトゥーゾフは軍を削減される厳しい状況での戦いを強いられたが、軍事的

93 カラジョルジェ・ペトロヴィチ率いる第一次セルビア蜂起はロシアの支援を期待して始まったが、1807年にロシアはフランス・オスマン帝国と和平を締結し、蜂起軍はオスマン帝国に鎮圧される。1815年のミロシュ・オブレノヴィチ率いる第二次セルビア蜂起は一定の自治の獲得に成功する。柴宜弘『世界史リブレット45　バルカンの民族主義』山川出版社、1996年、38-41頁；佐原「オスマン支配の時代」154-158頁。

94 Jewsbury, "Russian Administrative Policies," p.21.

95 ロシア軍の食糧調達によって農村はさらに荒れ、アレクサンドルは住民に負担を与えないようにクシニコフに指示している。Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.22-23, 35.

96 ホスポダルの下でファナリオットとボイェリが行政を統括していたが、ファナリオットはボイェリを押さえつけ、ボイェリは下位の者たちを痛めつけた。ディーヴァーヌには司法、財政、外交、宗教の4部局があったが、財政を握る者たちがディーヴァーヌにおいて最大の権力を誇り、公国の経済を支配した。ディーヴァーヌの命令を地元で実行するのは郡警察署長（исправник）であり、各地区に2名ずつディーヴァーヌによって任命された。彼らは地区の行政、裁判、警察、税の徴収などを管轄し、ディーヴァーヌの容認のもとで思うがままに権勢を振るった。特に農民からの税の徴収は彼らの最も重要な任務であり、懲罰や暴力によって残酷で不正な取立てを行ない、私腹を肥やした。また正教会の聖職者の勢力も強く、宗教のみならず政治にも大きな影響力をもっていた。Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.21-25; *Кассо Л.А.* Россия на Дунае и образование Бессарабской области. М., 1913. С.205.

97 Jewsbury, "Russian Administrative Policies," p.15.

98 *Кассо.* Россия на Дунае. С.193-195; Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.28-41.

99 イプシランディスは現地で専制的な統治を行ない、住民にロシア皇帝と自分に対する忠誠の宣誓を要求して本国から厳しい叱責を受けた。Jewsbury, "Russian Administrative Policies," p.29.

100 Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.13-15, 32, 93.

にも外交的にもロシアの有利になるように事を運んだ。1812年にオスマン帝国とロシアはブカレスト条約を締結した。ロシアはまたしてもドナウ二公国を手放さなくてはならなかったが、ドニステル・プルート川の間の地域を獲得に成功する(101)。ドナウ二公国のロシア軍はプルート川の向こうへ撤退し、新たに併合した地域はワラキア公国の建国者バサラブにちなんで「ベッサラビア」と名づけられ、ベッサラビア州となった(102)。

クリム・ハン国併合後ターヴリヤ県が設置された場合とは異なり、ベッサラビアはすぐに県政に編入されなかった。1806－12年の6年にわたってドナウ二公国を「占領」した苦しい経験から、ロシアはベッサラビア統治の困難を容易に予測することができた。クトゥーゾフに代わって統治者となったチチャゴフは、バルカンやモルドヴァの事情に詳しいイオニア出身のヨアニス・カポディストリアスにベッサラビアに臨時政府を設立する法案の作成を委ねた(103)。彼の指揮下で編まれた臨時政府法案は将来のベッサラビア自治政府の成立を見込んだ内容になっていた(104)。この法案はアレクサンドル1世の認可を受け、ナポレオン戦争の終わった1813年にベッサラビア臨時政府の設置が公布された。行政知事にはヤッシー条約以後ロシアに移住していたボイェリのストゥルザが任命された。軍務知事のハーティングはロシア軍最高司令官に従属する立場とされ、行政と軍事が明確に区別された。臨時政府には総会と二つの局が設置され、各局は三課から構成され、第一局は一般公務と裁判と警察業務を、第二局は統計、財務、商業を管轄した。職員はボイェリがロシア人職員に7対5の割合で優っていたとされる。業務にはルーマニア語とロシア語が平行して使用され、そのため各局にはそれぞれ二人ずつ書記がおかれていた。民事・刑事裁判においても、ルーマニアの伝統的な慣習法が尊重された(105)。

このように、オスマン帝国下のモルドヴァ公国でファナリオット支配にあったこの地域に、再びルーマニア貴族を中心とする政府が設置されたのであった。ロシア政府は併合後す

101　アレクサンドルはクトゥーゾフの功績に不満であり、またクトゥーゾフ軍によって生活を圧迫されたルーマニア住民からの苦情に悩まされ、彼に替えてチチャゴフを送り込んだ。*Кассо.* Россия на Дунае. С.118, 128.

102　1812年の時点でベッサラビア州には24万人以上の住民がいたとされる。モルドヴァ公国からギガス家、ストゥルザ家、ロセッティ家などの有力貴族が移住し、またカンクリンやネッセルローデなどのロシア貴族も広大な領地を所有した。またブルガリア人、ドイツ人、スイス人、ロマ人、ユダヤ人などさまざまな民族が入植した。　*Кабузан В.М.* Народонаселение Бессарабской области и левобережных районов Приднестровья (конец XVIII- первая половина XIX в.). Кишинев, 1974. С.26; Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.58-59, 70.

103　*Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.171; *Кассо.* Россия на Дунае. С.196, 198-199.

104　カポディストリアスは「ベッサラビアの法と慣習、言語、特権を保護し、住民の民族意識、彼らの要求、習慣に従わなくてはならない」と主張した。Patricia K. Grimsted, *The Foreign Ministers of Alexander I : Political Attitudes and the Conduct of Russian Diplomacy, 1801-1825* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1969), p.236.

105　*Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.171-172. ベッサラビアには成文化されていない慣習法の他に、アルメノプロ法典のようなファナリオット時代からの法律があったが、特権階級に有利な内容で信頼できるものではなかったとされる。主教のボドニはスペランスキー宛ての手紙でこれらの法律を「ギリシャ人の奸策」と呼んだ。*Кассо.* Россия на Дунае. С.205. 副知事として7年ほどベッサラビアで勤務したヴィーゲリによると、民事裁判は土地の慣習にのっとって行なわれ、保存されてきたこれまでの判例の中から合致するものが選び出されるが、どんなケースにも判決が2、3種類あってそれぞれ矛盾しているため、判事がその中から気に入った判例を選び、自分勝手にそれを適用したとされる。アルメノプロを用いることはあまり多くなく、極刑を伴う特別な審理ではロシアの法律に従ったとされる。*Вигель.* Замечания на нынешнее состояние Бессарабии (писано в октябре 1823 года) // Русский Архив. 1893. №1. С.23.

ぐにベッサラビアの完全なロシア化に着手したのではなく、伝統的な地元の行政・社会システムを温存し、それらを媒介に統治する方式を採用したのである。これまでファナリオットに頭を押さえつけられていたボイェリはロシア帝国下に移ったことによって権勢を取り戻し、ルーマニア人農民は不正にまみれた税制や体刑を伴う苛酷な取り立てに苦しみ続けることとなった。そして農民やロシアの行政に不満を持つ貴族など多くのルーマニア人が、プルート川を越えて公国へ戻っていった(106)。

チチャゴフは1812年にナポレオン戦争のために本国へ帰還し、ベッサラビア統治はC.ストゥルザとИ.М.ハーティングに委ねられた。ストゥルザはエカチェリーナ時代からの親ロシアの家臣であったが、ルーマニア人農民の農奴化を防ぐなど地元住民の権利や慣習を保護する立場であった。一方ハーティングは強硬にベッサラビアのロシア化を主張し、ボイェリと鋭く対立した。彼はベッサラビアへのロシア的行政機関の設置とロシアの法律の導入をペテルブルグに訴え続けた。ボイェリも負けずにハーティングの横暴に対する苦情や保護の要請をペテルブルグに送りつけた(107)。1813年にストゥルザは健康を損なったとして職を退き、ハーティングが行政と軍務の知事を兼任することとなる。1814年に彼はペテルブルグにベッサラビア統合色の強い新法案を送ったが、にべもなく退けられた(108)。ロシア政府はベッサラビアをすぐに県政に編入することは難しいという見解で一致していたのである。ハーティングは道路の整備や病院の建設などの業績を残したが病を理由に身を引き、カテリノスラフ知事であったカラジョルジェが後任となった。また1813年にアレクサンドルはキシニョフ・ホティン主教管区を設置し、親ロシア派のガヴリール・バヌレスコ・ボドニが初代主教に任命される(109)。

ナポレオン戦争も終わった1815年、ロシア政府はようやく本腰を入れてベッサラビア問題に取り組み始める。ペテルブルグにベッサラビア州統治法制定のための委員会が設置され、カポディストリアスがその中心となった。またベッサラビアに総督府（наместничество）を設置するという提案がアレクサンドルによって承認され、ポディル県軍務総督のA.H.バフメテフが初代ベッサラビア総督に任命された(110)。孤立させられたハーティングとは異なり、最初から政府の応援を得たバフメテフは、ベッサラビア改革の実行に有利な状況で赴任した。その彼も変革に冷淡で非協力的なボイェリに悩まされた。会議を召集してもボイェリは欠席するか出席しても眠っており、業務は停滞した(111)。それでもバフメテフはカラジョルジェ

106 Jewsbury, “Russian Administrative Policies,” pp.101-102.

107 また貴族層から特権が奪われるなどの噂が広まったことがボイェリの間に不安を引き起こした。 *Кассо.* Россия на Дунае. С.206-209; Wim P. Van Meurs, *The Bessarabian Question in Communist Historiography: Nationalist and Communist Politics and History-Writing* (New York: East European Monographs, Colombia University Press, 1994), p.92.

108 *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.173.

109 ボドニは次の主教となるドミートリー・スリマとともにルーマニア語の文法書や聖書を出版するなどルーマニアの伝統の保護者として活動し、主教管区の設置はルーマニアの伝統や文化や言語の保護に大きく貢献する結果となった。その一方で彼はアレクサンドルの信頼をかちえ、のちの「1818年憲章」でベッサラビア住民に文官勤務や兵役の免除という特権を付与させることに成功する。また学校の建設や新しい教育システムの導入などにも貢献した。Jewsbury, “Russian Administrative Policies,” pp.102-104; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.172-173.

110 *Кассо*. Россия на Дунае. С.212; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.173.

111 Jewsbury, “Russian Administrative Policies,” pp.126-127.

とともに裁判システムや税制や法律を整備し、ロシア役人とボイェリから成る憲法作成チームを結成し、カポディストリアスの基本案をもとに新法案を練り上げた。それは1817年にペテルブルグに送られ、1818年皇帝の承認を経たのち「1818年ベッサラビア州設立憲章（Устав образования Бессарабской Области）」として公布された(112)。

1818年憲章はベッサラビアの自治を保護し、ボイェリを中心とする伝統的な行政・社会システムを温存した内容になっていた。キシニョフが州都で、ベッサラビアは6郡に分割された。最高会議がおかれ、管理・運営機関・立法機関・最高裁判所としての機能を果たす自治政府の役割を担った。ただし最高会議の議長はポディル軍務総督であり、その下に行政知事、副知事、2人の民事・刑事裁判所判事、6人の議員がおかれた。彼らは貴族階級から選ばれ、軍務総督の承認を受けて任官し、任期は3年とされた(113)。

統治機関におけるロシア語とルーマニア語の併用が義務付けられ、民事訴訟においてはルーマニア慣習法の適用が認められた。さらに主教ガヴリール・ボドニの願いを汲んだアレクサンドルの意向が反映され、ベッサラビア住民は文官・軍務の国家奉仕を強制されないとされた。貴族や聖職者、商人や農民などの階級が創設され、ボイェリや聖職者はモルドヴァ時代からの特権を保障された。商人には税の支払いと引き換えに帝国内で自由に商業活動を行なう権利が与えられた。ルーマニア人農民は自由人としての権利を保障され、ロマ人とユダヤ人以外の全てのベッサラビア住民に土地を所有する権利が与えられた。しかし農民には人頭税や十分の一税の支払いをはじめ、軍や裁判、郵便制度、橋梁や道路の維持のための税の支払いなどを義務付けられ、モルドヴァ時代からの伝統的な税システムが色濃く残されたままだった。したがって1818年憲章はルーマニアの伝統や言語を保護したが、ボイェリの特権的地位とルーマニア人農民の搾取される立場をむしろ確定的なものとした。またボイェリとロシア人貴族の権利が平等とされ、ベッサラビア州の政治はもちろん帝国全土の県政にボイェリが参加することが可能性が開かれたが、これは彼らをロシア帝国貴族階級に吸収し、ベッサラビア州統治を帝国の県政により近づける要因となった(114)。

そしてこのような内容の1818年憲章がベッサラビアに秩序をもたらすはずはなかった。特権的地位を保障されたボイェリは農民への支配力をさらに強めようとし、また選挙に対する熱意にもかかわらず行政に対する無関心は相変わらずであった。バフメテフは強制的にボイェリを従わせようとしたが、ハーティングの時と同様にボイェリはペテルブルグに書状や代表を送って不満を訴え、ボイェリ同士でバフメテフへの不服従を申し合わせるなどの手段

112　*Кассо.* Россия на Дунае. С.215.

113　この年の第一回貴族選挙では、ボイェリたちは互いに対抗意識を燃やし、選挙会場で二つの対立グループが流血を伴う大喧嘩をし、巻き込まれたロシア人役人が命を落としかけたとされる。またバフメテフは、新設されたたくさんの代表職を埋めるために貴族を少し増やそうとして特別委員会を一日だけ設置したが、ボイェリたちが自分の御者や料理人などを登録したため、260家の新貴族が誕生したとされる。*Вигель.* Замечания. С.12-14.

114　「1818年憲章」の抜粋・内容に関しては *Семенов Ю.И. (ред.)* Национальная политика в императорской России : Цивилизованные окраины (Финляндия, Польша, Прибалтика, Бессарабия, Украина, Закавказье, Средняя Азия). М., 1997. С.233-239; Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.131-146; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.174.　またこの憲章では、ボイェリや聖職者、商人階級にロマ人を私有財産として所有する権利が保障されており、また売買も許され、ベッサラビアのロマ人は奴隷のような身分にあったとされる。*Дружинина Е.И.* Южная Украина в 1800-1825 гг. Москва, 1970. С.165.

で対抗した。1820年、彼らとの対立を克服できずにバフメテフもまた職を退いた(115)。続いて総督となったИ.Н.インゾフは、ブルガリア人入植者の世話や道路の敷設や植林などに業績があった(116)。しかし彼の3年の統治期間に郡警察署長（исправник）などの横暴とボイェリの怠慢は極まり、結局インゾフもまた職を辞して再び外国人入植者の世話役へと戻っていった(117)。憲章制定から5年、併合から10年経っても、ロシア政府はベッサラビア統合への道筋を付けるどころか混沌とした状況を改善することすらできなかったのであった(118)。

しかし1823年にノヴォロシア総督となったM.C.ヴォロンツォフがベッサラビア総督を兼ねることとなった時から、ベッサラビアは大きな転換期を迎える。軍人による統治が続いていたベッサラビアに最有力貴族の行政官が赴任するのは初めてのことであった。ベッサラビアの惨状を常々聞かされていたヴォロンツォフはキシニョフに乗り込むと、半年をかけて現地を査察し改革に取りかかった(119)。改革の指針はベッサラビア自治の制限であった。ヴォロンツォフは1824年の貴族選挙の前にルーマニア人貴族の数を削減し、彼らを行政や裁判から締め出してロシア人役人を増やした。また郡警察署長を知事による任命職にし、農民に対する暴挙と税の不正な徴収を防いだ。税制も改革し、税を財務担当者に直接納入するシステムなどを導入し、また密輸や強盗団や家畜の疫病などの問題にも対処した(120)。

さらに、ルーマニア人に同情的であったアレクサンドル1世が1825年に死去する。1821年のエテリア蜂起(121)を引き金に始まったギリシャ革命の結果、カポディストリアスが1827

---

115 Jewsbury, "Russian Administrative Policies," pp.159-160.

116 インゾフは軍人であったが意志薄弱で頼りなく、「温厚な庭師」と呼ばれた。1818年から「南ロシア外国人入植者保護委員会」の委員長としてベッサラビアのブルガリア人入植に携わっていたが、彼の下で勤務したファデーエフは、彼が「ボルグラード（訳注：ベッサラビアの都市）の建設とベッサラビアへのブルガリア人の入植の世話に没頭し…それ以外の問題やコロニーにはあまり関心を持っていなかった」と述べている。 *Фадеев А.М.* Воспоминания Андрея Михайловича Фадеева (1790-1867 гг.) // Русский Архив. 1891. №1. С.468; *Кассо.* Россия на Дунае. С.220.

117 ヴィーゲリは最高会議の民事裁判におけるボイェリの勤務ぶりを次のように描写している。「…通常10時に不満そうな顔つきで集まってきて、つまらなそうな無関心な顔つきで審理に耳を傾けながらそれぞれが一時間に6回以上あくびをする。12時を打つと、彼らの視線は絶え間なく壁の時計に注がれ…12時半になると皆腹が減ってうずうずした様子になり、ある者は立って座ってまた立ち上がり…ついに時計が1時を打つと皆にぎやかに立ち上がり、『帰ろう帰ろう、お昼の時間だ』と歓声を上げる…」 *Вигель.* Замечания. С.9-10.

118 インゾフは貴族選挙の改善に一定の成果をあげた。1821年の第二回貴族選挙では彼が用心したため騒ぎは回避された。また自ら貴族選定委員会の委員長となり、貴族を三分の一の170家までに削減することに成功した。*Вигель.* Замечания. С.14.

119 Anthony L.H. Rhinelander, *Prince Michael Vorontsov: Viceroy to the Tsar* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1990), pp.66-70.

120 Jewsbury, "Russian Administrative Policies," p.195-200; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. С.175. ヴォロンツォフはノヴォロシア・ベッサラビア総督としても、初代カフカース総督（наместник）としても強権を振るったが、強硬なロシア化政策の推進者ではなく、現地の風習、教育、信教などに一定の理解を示したとされる。 Rhinelander, *Prince Michael Vorontsov*, pp.157, 160-163; 高橋清治「帝国のカフカス支配と『異族人教育』」『ロシア史研究』第60号、1997年、75-76頁。

121 1814年にオデーサのギリシャ人商人が結成した秘密組織「フィリキ・エテリア（友愛協会）」が1821年にモルドヴァで起こした蜂起。彼らの最終的な目標はコンスタンティノープルを首都とするギリシャ国家の建設であったとされる。カポディストリアスを指導者として招こうとしたが断られ、やはりアレクサンドル1世の側近であったファナリオット出身のアレクサンドロス・イプシランディスを指導者とした。ロシアの支援は得られず西欧諸国はオスマン帝国に味方するなど不利な条件であったが、蜂起軍にはルーマニア人、セルビア人、ブルガリア人などが参加し7,000人に達したとされる。彼らは最終的にオスマン帝国軍に鎮圧されるが、これをきっかけにギリシャ革命がはじまり、またドナウ二公国では1822年にファナリ

年に初代ギリシャ大統領となり、また1821年に主教のガヴリール・ボドニが世を去り、ベッサラビアはペテルブルグにおける支援者と政府との交渉役の両方を失うこととなった(122)。

ヴォロンツォフはベッサラビア統治の新法案を作成してペテルブルグに提出し、1828年に「ベッサラビア州統治法令」としてニコライ１世に認可された(123)。この法令によってベッサラビアの自治は廃止され、ベッサラビア州の最高権力者はノヴォロシア・ベッサラビア総督となった。1818年憲章は廃止され、最高会議は決定権や裁判権を持たない州会議となった。これまで最高会議のメンバーはボイェリから選出されていたが、州会議ではボイェリはもはや多数派ではなくなった。郡警察署長の権限も同様に大幅に削減された。また業務におけるルーマニア語とロシア語の併用はとりやめて通常はロシア語が使用されることとなり、必要に応じてルーマニア語に訳されることとなった(124)。税制は改革されたが、農民の負担が大きく軽減されたわけではなかった。

その一方で、ベッサラビアはその独自性を完全に失ったわけではなかった。州としての統治形態は継続され、最終的に州から県となるのは併合から60年後の1873年のことであった。ベッサラビア住民を農奴とすることは禁じられたままであり、ベッサラビアにはついに農奴制は公式に導入されなかった。国家奉仕の免除も同様に据え置かれた。またルーマニア人がほとんどいないイズマイル郡とアッケルマン郡を除いた地域では、民事訴訟において慣習法の適用が今後も認められた。またベッサラビアにおけるルーマニア語使用はその後も継続され、ルーマニア語での教育が禁じられるのは1867年であり、最後のルーマニア語出版物の印刷所が機能しなくなるのは1883年とされる(125)。

ロシアにとって、ドナウ二公国とベッサラビアの統治は苦難に満ちた道のりであり、バルカン進出の一環という通常のイメージとはかけ離れたものだった。ロシア人はボイェリを服従させることはできず、ロシア化政策はおろか秩序をもたらすことすら容易ではなかった。ルーマニア人農民にとってはオスマン帝国下のモルドヴァ公国でのファナリオット支配も、ベッサラビア州でのボイェリ支配もロシアによる自治廃止も大きな差はなかった。ボイェリはモルドヴァ時代から一貫して農民を搾取することしか頭になく、彼らにとってはファナリオットよりロシア人のほうが御しやすい統治者であった。そしてボイェリはヴォロンツォフによるベッサラビア自治廃止すら傍観した(126)。彼らはロシア人役人による干渉には団結し

オット支配が廃止されることとなる。柴『世界史リブレット45』41-44頁；佐原「オスマン支配の時代」160-167頁；今井「地域の内外ネットワーク」306-309頁。

122　*Кассо.* Россия на Дунае. C.225; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. C.175.

123　*Семенов (ред.).* Национальная политика. C.240-244.

124　Jewsbury, “Russian Administrative Policies,” pp.200-205; *Агаджанов (отв. ред.).* Национальные окраины. C.175-177.

125　Van Meurs, *The Bessarabian Question*. pp.46,48. 1826年にロシアはオスマン帝国とのアッケルマン条約によってモルドヴァとワラキアにおけるオスマン帝国との共同宗主権を獲得し、ドナウ二公国ではロシアの影響力のもとでボイェリ選挙制が復活する。ロシアはクリミア戦争後の1856年にベッサラビア南部を一時返還するが、1878年再び併合する。1859年にドナウ二公国は合併してルーマニア王国となり、ロシア革命から第二次世界大戦にかけてベッサラビアの領有を争うこととなる。柴『世界史リブレット45』63-65頁；佐原「オスマン支配の時代」177-180頁；六鹿茂夫「多様な社会主義の試み」柴編『新版世界各国史18』331-333頁。

126　またハーティングやバフメテフの時期に比べてボイェリのロシア化がより進んでいたと考えられる。*Кассо.* Россия на Дунае. C.225; Jewsbury, “Russian Administrative Policies,” p.198.

て抗議したが、特権階級としての地位さえ保障されていれば、ルーマニア人による自治を謳った憲章や最高会議に執着などなかったのである(127)。このように少なくとも初期の段階においては、広大な帝国領の一片にすぎないベッサラビアに対するロシアの影響力は、実は極めて弱かったのであった。ベッサラビア統治を成功させてバルカン諸国へアピールするはずだったロシアは、逆にその無力ぶりをさらけ出すこととなったのである。

おわりに

ここでは南部地域の併合とノヴォロシア・ベッサラビア成立までの過程を考察した。ロシアは圧倒的な武力で領土を占領して最初から強硬なロシア化を推進したわけではなかった。また征服される側は、親ロシアと反ロシアの内部分裂や迎合・逃亡・無関心といった行動を見せた。特に貴族や聖職者には自らの利益だけを追求する傾向があった。ウクライナのロシア人役人はときに、ウクライナ人農民を苦しめるスタルシーナやシュリャフタへの対応に追われた。エカチェリーナはシャヒン・ギレイの改革を辛抱強く支持し、アレクサンドルはベッサラビアのロシア人統治者に対する以上にルーマニア人に同情を示し、ロシア人統治者はボイェリに振り回された。ロシアの南下政策は試行錯誤の道のりであり、征服者と被征服者のあいだには対立配置では理解できない複雑な関係があったのである。

今後はノヴォロシア・ベッサラビア総督府がどのような統治を行なったかを検討し、この地域独自の事例を呈示することを目指す。民族政策について考えるならば、対クリム・タタール政策が重要な位置を占めることとなる。ロシア政府はヴォルガ・ウラル地域併合の反省を踏まえ、クリム・タタールに対してはイスラーム伝統の温存・有力者層の吸収という方式を採る(128)。そして同様の政策方針は、カフカース総督府を経て1867年に設置された中央アジアのトルキスタン総督府に受け継がれることとなる(129)。また、クリミア半島から多くのタタール人がオスマン帝国に移住し、逆にロシア人や他の民族が大量に入植するが、それ

---

127 ルーマニア人の自治や利益、ルーマニアの伝統・文化・言語の保護を真剣に追求していたのは、ガヴリール・ボドニや彼とともに活動した人々であった。

128 Fisherは、クリミアに特別な関心を寄せず、他の南部地域と同様に扱うことがロシアの基本方針だったとしている。Fisher, The Crimean Tatars, p.73; Hakan Kirimli, *National Movements and National Identity among the Crimean Tatars (1905-1916)* (Leiden: E.J.Brill, 1996), p.3. ただしクリミアにおいても特に1829年から宗教迫害が強まったとされ、しばしばムスリムに正教への改宗が強制された。また1833年にタタール人から古文書や古書が押収されて焼却されるなど、文化的な迫害もみられた。戦争のみならずこのような迫害もまたクリム・タタール人の大量国外移住の一因となっている。*Зінченко.* Кримські татари. С.53（前注35参照）.

129 Alan W. Fisher, "Enlightened Despotism," p.543; Adeeb Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform : Jadidism in Central Asia* (Berkeley: University of California Press, 1998), pp.49-61. 初代トルキスタン総督のК.П.カウフマン（在任1867－81年）は1843－56年にカフカース戦争を経験しており、当地で総督ヴォロンツォフ（在任1844－53年）の比較的穏健なロシア化政策の影響を受けていた。やはりカフカースで山岳民族との戦争を経験したД.ミリューチンも強硬なロシア化政策の失敗を痛感し、トルキスタン総督にカウフマンを推した。トルキスタンでカウフマンはムスリムの高位職や組織を排除するなどしたが、概してイスラーム伝統を「無視」する不干渉政策をとった。Daniel Brower, "Islam and Ethnicity: Russian Colonial Policy in Turkestan," in Daniel R.Brower and Edward J. Lazzerini, eds., *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1997), pp.116-120; David Mackenzie, "Kaufman of Turkestan: An Assessment of His Administration (1867-1881)," *Slavic Review* 26:2 (1967), pp.267-270, 284.

でもバフチサライとカラスバザールの二都市はクリム・タタールの文化・運動の拠点となり、ガスプリンスキーなどのジャディードが活動し、帝国内外の他のムスリム地域とのつながりが強まることとなった(130)。このような諸地域間の政策や運動の時間的・空間的関連性を理解するためにも、各地域の研究は今後も重要になってくるだろう(131)。

130　Fisher, *The Crimean Tatars*, pp.94-108; Alan W. Fisher, "A Model Leader for Asia, Ismail Gaspirali," in Edward A. Allworth, ed., *The Tatars of Crimea: Return to the Homeland* (Durham and London: Duke University Press, 1998), pp.29,40., Edward J. Lazzerini, "Ismail Bey Gasprinskii (Gaspirali): The Discourse of Modernism and the Russians," in Rywkin, ed., *The Tatars of Crimea,* pp.48-50; Edward J. Lazzerini, "The Crimea under Russian Rule, 1783 to the Great Reforms," in Rywkin, ed., *Russian Colonial Expansion to 1917* (前注 15 参照), pp.134-135.

131　松里公孝は 19 世紀半ばにおける西部諸県のポーランド人政策とヴォルガ中流域のムスリム政策の同時進行性を指摘している。松里公孝「序論にかえて：ロシアの歴史と政治におけるイスラム・ファクター」松里公孝編『ロシア・イスラム世界へのいざない』スラブ研究センター研究報告シリーズ第 74 号、2000 年、7 頁。